



特別  
ハ 7.  
5167  
2



義正月抄

系

心

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

法者抄

洛東向旭山寺檀大徳都

月瀬又庫

門才子書記寫

實盛

西方十萬億土をくまらざる家も己身  
の浄土の國

則不勝其無佛之慧性念産元世男が其所不在是以一  
切众生奉て勸導皆在佛之性中と云ふ河津法蓮  
後其西方の十萬億佛土有也男名曰松年とあり天台大

仰止觀二之通海山觀者念之方河海流佛去此十善修佛  
利と控一のつれあふに十善修佛の河海流佛の  
淨土ありといふ事と念母其見ありといふ佛の流  
生と念母念をくらに念母其見ありといふ事にして案を  
西方一淨土といふ事ありといふ事ありといふ事あり  
者なり此中に林布逸中より佛は念母修佛人  
のがりのあり念母流中といふ事あり念母佛人  
やういふ事ありといふ事ありといふ事あり  
などれは流と念母に流海の淨土二十二三あり  
ひと念母念事と修り出さる事れやういふ事あり

富云此のなればやと念母念をくらに念母其見ありといふ事あり  
などれは流と念母に流海の淨土二十二三あり  
と念母念に念母念事と修り出さる事れやういふ事あり  
の念母念人といふ事ありといふ事ありといふ事あり  
若勢東坡柳子厚のやうに樂邦と念母其見ありといふ事あり  
わつらりし智旭云信事者深信長今現前一念不可是所  
以依心所現一切十方世界不可是實有極樂國土在於  
十善修佛之方最極淨土者不同莊生寓云是名修佛  
理者深信極樂土雖在十善修佛之方而實不常我念今  
現念亦一念心外以吾現前一念心性實亦不常我念今





貴賤群生此稱名の聲日く夜に法のゆゑ実をま

とに捨れ不捨の誓ひは唯り跡の毎い

捨れ不捨と云ふの呪の光の遍照の文よあつ書訓

よふとあつてとてあつとむる光のうらゝる生

とてしきぬ事親の子とてあつとむる宿妙叶

今佛垂指の月照不離誓願我に摩訶とひ阿弥

陀羅呪のよれ生没於若親佛授之妙法を深剛と云

とみかちあつてとてあつとむる事とて之誓とて光明

とて捨れしあつとむる法にの御誓願とてり

る相誇り高麻をよむ法なり

誓ひの御誓願の御誓願とてり

とてあつとむる誓ひの御誓願とてり

とてあつとむる彼をゆゑ法の御誓願とてり

や

心引法法の網と云ふ行者れ心と法法の誓願と云ふ

事と網と云ふよひひをさうばり誓ひの網と御誓

願と云ふ生と云ふひの御誓願の魚と云ふに云

と張高英集云法沈極彌網之網花者誓願を公衆

網と云ふと云ふの御誓願が云に御誓願の御誓

と人にと云ふと云ふの御誓願に御誓願の御誓

と人にと云ふと云ふの御誓願に御誓願の御誓

ましおの下のしるる人もあられんを渡さむやしらる  
 車にいかりの古事にあざぶるあがるべしひり  
 息を傍に信濃の善光寺に運搬して脱法しめ  
 とた不曇派をよめ下に向れうひある事ありを  
 向る彼處ゆゆ舟のうひかいらし十回家て時傍  
 都りて殊勝しやむはとせんあましそまうし  
 い善光寺に如來の御告るべしと名あひえん  
 やそ彼堂よあめく脱法しとめあひては向り  
 ちひより人あつた上に向て付るべしと候養とた  
 めあよ下座よ一人の傍に安塞やれぬのありては

ちひより人あつた上に向て付るべしと候養とた  
 せらりまに上の向と却て見物人といひえん  
 いひまれの傍都の傍よまれそ縁ふおありと  
 るれがやそそ人の付向にのりえう人といまら  
 ちひより人あつた上に向て付るべしと候養とた  
 めあよ下座よ一人の傍に安塞やれぬのありては  
 ちひより人あつた上に向て付るべしと候養とた  
 めあよ下座よ一人の傍に安塞やれぬのありては  
 ちひより人あつた上に向て付るべしと候養とた  
 めあよ下座よ一人の傍に安塞やれぬのありては

よきぼつたやとり方又字のしよふ人かほわ

やーとせふもまうしこみればほつたの由と妻

あひつらよと感涙とぞ流よとふあゝものま

とろも若光寺通観相持の中につらひ事につら

あふとこいとも世徳とくお念とつらうたれ

むらう事とつらなるらんれ出のちと徳都は

とつらまじりのみ徳とつら人をとくぬもま

彼の中へぬれつらひとつらのあつたれ

とつら徳は彼の中へはのあつたれ

事につらぬとんつら法のあつたれ

柏崎のふと力れぬとつらあつたれ

とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつら

すつらとつらと

望秋らつらとつらとつらとつらとつら

前着ぬらとつらとつらとつらとつら

此の天は定基入道して寂照法師とつら

涼山は藤よとつらとつらとつらとつら

てのつらとつらとつらとつらとつら

一書とつらと

佛のる念佛は色のあつた





先ん今念佛の切に思ふもあらず此高想を去るべし  
るを千第位刹しりてらる事念を念念と昧  
に思えあらず念念よらる海なるもたる目れあ  
のいりてらる事も念念のたるとなり勢もみ  
れららるにほひまが事なりあまらる事  
免るけえまがあ月あにわりとたれあ  
のさあるべし去る大師の十数論の義にたれ業力不  
可思後一念即生不須愁をてや捨あて淨土  
往生とる淨りれ業力不思後免る最後の時念たわ  
びに歸時よ生とるあよとらとるけくたれあ  
らると淨土指ぬる云の居士曰極樂去此十第位刹  
夫命終頃刻即至不思蓋自念妙耳とれ業のとた淨  
男いさうととと一をれ神をと一神あるれは生  
れたれいふもたらたたを紙燭のさるに火現  
そのせとまあ夫よびとら湯と湯とれあまらる一  
滴のあるとほとら地よあつる法と法とのりわえ  
は生とるもとまらるは男一をれ妙ひらととと  
自念の念中ありあらず生れあ方と縁ひり淨  
業よひらとあまらる事たれたれととと  
れ一神よかりらるにて同もあひらとととの説と回

らると淨土指ぬる云の居士曰極樂去此十第位刹  
夫命終頃刻即至不思蓋自念妙耳とれ業のとた淨  
男いさうととと一をれ神をと一神あるれは生  
れたれいふもたらたたを紙燭のさるに火現  
そのせとまあ夫よびとら湯と湯とれあまらる一  
滴のあるとほとら地よあつる法と法とのりわえ  
は生とるもとまらるは男一をれ妙ひらととと  
自念の念中ありあらず生れあ方と縁ひり淨  
業よひらとあまらる事たれたれととと  
れ一神よかりらるにて同もあひらとととの説と回

久き事之あらはれしを心とて行めて去け不き其業と  
 うき業にして得の始よあきて十業住ましようし  
 して諸行の親よりしつとて其を父として事成  
 しんまうれば其の末のまひなれ親の去け不  
 きをわづらわらる事あるぞとて念佛せしと  
 して南無と云ふ佛とてあきらりて百業のさつと  
 びえし

ありの義相と毎日其縁名を念ふ事ありしに  
 念ぶ者ころあやましの深余人のあやま  
 僅よびしして何れも手そとて空人不奪一あるは

ちとれ若し其業をたれあひしあひぬらなむり取ら  
 わぬさがる鄙人あれいんあやまを名とあやまを名  
 あり唯と入れし下の偏の縁名の縁名ありしを  
 ありしはし給し若し時言ひ多事あやまは縁名  
 曇花の花はえさうらして老の事ありあえはひ  
 の縁名ありわまるされいありあやま安楽ありまら  
 うしひれ縁名ありの縁名あり念の縁名の縁名と  
 ありあやまの縁名は縁名ありまら  
 ひ実塵の幽魂の縁名あり毎日縁名ありしとて名と  
 しひえさう縁名ありに無門関百文縁名あり





いぬらひの華梵毅拳とあり名實兼孟業を新  
紀をいふとあり姐をいふとあり此鬼と後悔して  
の道よふとありむむとありとありて愧  
とうとありわめすにいとふとあり後悔の姐を  
いふ事と懺悔の六根懺悔の候に悦身の鬼不敬  
覆死といふとありとあり

叔わがといふ実盛の生幽霊とあり悔とあり我實  
盛が幽霊とあり鬼と真達とあり鬼とあり  
らまうして執念の周浮の世と二百余衆の精とあり  
ともうらひまわるといふとあり

いふとあり周の妻ともなく現ともあり

幽霊といふとあり真よりこれとありとありとあり  
源氏信孝の光の源氏の幽霊といふとありとあり  
さて次は鬼と真達とありとありとありとありとあり  
者新也陽也氣魄者陰也形也淮南子に天氣為魂  
地氣為魄といふとあり朱熹の語に魂歸于天形歸于地  
とありとあり礼記郊特牲曰魂氣歸于天形魄歸于土  
鄭氏注曰骨肉歸于土魂則壽所不之とありとあり魂陽  
れあまのあまの真漢とて塵定とありとありとあり  
のたまりおがまの真漢とありとありとありとあり



ことありて同じく書中にて下れ家廟に先祖の舎  
 どもありて子孫を祀りてたりやあひあひ事なると  
 之のちゆり事なればなりと死よ自伝流 主事と抄法  
 ありて先祖同族縁の善いも師曰池田有看池教可節云  
 ありて天性起り死蓋之種滅とありけ養の種よるの  
 孔子家語第二致國篇にのさるるといふ首う孔子  
 とひ事にとれ死にありてのらなるありてよく  
 之のち事あるの秋も死のあひとあることうのち  
 と孔子れらわらうんも一死にんなるぬらぬらぬ  
 ありとらう孝子孫のあひひいらのいといふて死

どもありて同じく書中にて下れ家廟に先祖の舎  
 どもありて子孫を祀りてたりやあひあひ事なると  
 之のちゆり事なればなりと死よ自伝流 主事と抄法  
 ありて先祖同族縁の善いも師曰池田有看池教可節云  
 ありて天性起り死蓋之種滅とありけ養の種よるの  
 孔子家語第二致國篇にのさるるといふ首う孔子  
 とひ事にとれ死にありてのらなるありてよく  
 之のち事あるの秋も死のあひとあることうのち  
 と孔子れらわらうんも一死にんなるぬらぬらぬ  
 ありとらう孝子孫のあひひいらのいといふて死

法も抄実盛二

五



かつ縁くみのみれ儒をうへ人安養翁とのすのよた  
 つひのいおまぐ返簡よは死鬼神遊鬼神今古之儀  
 無説嘉之何况於腐傷哉と云ふなりと記あり  
 され後時よは元とのありて無鬼論とありて死  
 しこれに鬼神れふふゆら事と云ふと云り凶犯の記  
 とんゆらに阮籍が兄の孫賸とのふのふよ無鬼論との  
 みけありしゆらと云鬼ありて人と云うて事の孫賸と  
 同参る事と記あり又阮咸が後子よ修といふのひ  
 言鬼の事と執りこれとありてふ人のいふ人死  
 鬼とがる事と君何とて事といふとありしに  
 事といふやうに今世に鬼といふものもあはれどあはれ  
 多る所の家といふらふこといふにまよふも鬼のいふ  
 こと阮籍とならふ事と云ふもゆらと云鬼とて  
 わらに阮籍といふものありて家と云鬼と云ふと  
 事といふわらふ人の理をよまされらふと云事と  
 事といふゆら人を理よ事と云ふよまされらふなりこれ  
 鬼の化して家と云らふと死らふ人のいふらふ家の化と似  
 とくふらふ事と云らふと云事と云ふ事あり  
 先南介死して魂れらぬ事との事先儒といふ  
 事ありて事と云ふと云事と云ふ事なるれよ

事といふやうに今世に鬼といふものもあはれどあはれ  
 多る所の家といふらふこといふにまよふも鬼のいふ  
 こと阮籍とならふ事と云ふもゆらと云鬼とて  
 わらに阮籍といふものありて家と云鬼と云ふと  
 事といふわらふ人の理をよまされらふと云事と  
 事といふゆら人を理よ事と云ふよまされらふなりこれ  
 鬼の化して家と云らふと死らふ人のいふらふ家の化と似  
 とくふらふ事と云らふと云事と云ふ事あり  
 先南介死して魂れらぬ事との事先儒といふ  
 事ありて事と云ふと云事と云ふ事なるれよ

正統編の紀海東人福教及びの傲流敗元座指護法海  
れぬさひにき痛しき事され今又つづく等と

考にてもつづく事ありてさて次は同浮取事正統  
考にてもつづく事ありてさて次は同浮取事正統

わひては懺悔するべしとあり  
わひては懺悔するべしとあり

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん

いふ別付の録名より被幽害とありん  
いふ別付の録名より被幽害とありん



とくく南無阿彌陀佛をいひて

法のありとていふ法とありまたありとていふ法をいふ法あり

いふ字の神海神文の字の文字の法花懺法をいふ

まの産直明法ありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり

とていふ法とありとていふ法とありとていふ法とありとていふ法とあり



トニテ半手ニシテミヤムリヤニシワンニシテ...

去刻皆奉命帝任運を彼處至一生補...

位の方と見しより吾を奉次もも皆悉到彼必自致不退...

猶と此のありて早免れざる不退といふ志のそゝぬとよ...

みるゆゑの世男又ともはるる者さうの養之天衣大師の...

十穀福の淨土を自ら又持の因縁わつ事と物...

身り思の善心云けし酒室十位方若苦痛...

心違不支大通佛世交友之信大通佛...

已近慈然劫末名在受安之地...

如月の子也從之能自長道...

初發心之奉封中多及其結果...

事とひ本ら花さく付るを教りておほきれり...

あは極末藉彼勝跡地凡史役階不退...

也極末の極末とらふも極末の極末...

よは極末の極末とらふも極末の極末...

越致不亦心我不知佛とありけ河惟越致...

越致不亦心我不知佛とありけ河惟越致...

越致不亦心我不知佛とありけ河惟越致...

越致不亦心我不知佛とありけ河惟越致...

持これ梵道のうりへ奉事奉佛れあつひひりく相濟

をされいのられ佛也ホトケやチもチあチあチあチあチあチ

あチりチやチ今チくチ相續チとチりチ人チるチ念チとチ毎チのチ健生チとチ

善守和尙後漢云念チとチ相續チ畢チ命チ為チ約チとチもチ念チとチ毎チのチ健生チ

とと河沙沙沙沙云念チとチ相續チ念チとチ相續チ念チとチ相續チ念チとチ相續チ

身妙果不離一チ心チ如チ符チ也チ既チ昇チ時チ為チ何チ侯チ汝チ安チ非チを

方育チ寶チ池チ今チ住チ持チ名チ使チ非チ汝チ安チ非チ界チ内チ人チ美チとチ體チを

まチりチこれチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チ

念チれチ何チとチなりチ健生チの時チ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チ

健生チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チ

めチとチ春チにチのチうチ果チとチのチいチのチいチのチいチのチいチのチいチ

とチなチ紙チえチたチ妙チ果チのチてチいチひチとチりチりチりチりチりチりチりチ

もチまチ一チ心チ本チ具チ之チ假チ念チ命チれチりチりチりチりチりチりチりチ

りチりチとチもチ移チされチもチ一チ心チのチうチよチのチうチよチのチうチよチのチうチよチ

事チのチあチらチいチぬチいチぬチいチぬチいチぬチいチぬチいチぬチいチぬチ

とチれチもチぬチいチぬチのチうチらチれチ一チ心チのチうチよチのチうチよチのチうチよチ

らチ今チ世チ来チ世チのチうチらチもチやチうチあれチとチいチぬチいチぬチ

折チらチりチとチ一チ心チ也チはチ同チ一チ心チ也チはチ同チ一チ心チ也チはチ同チ一チ心チ也チ

健生チれチ何チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ相續チとチ念チとチ

七家の心はありあらずやと云ふは住持の

法華經疏卷三

廿二

南遊ぐられりし中夜の客に因り人よありてとあるべき  
 事をしていふに遊遊とあるは先徳と親しく生猶よは夫毒  
 地に住する様上九歳を先請津とありありとありし人  
 名由りて見ゆれば此の本と云ふ我とゆへんを  
 よらふと念くおとよ生とある事を知りしひわを  
 角一幽溪沙門侍梵の侍と生無生論の節今念佛  
 之を便定南來華池交生之時とあると云ふは義あり  
 南来といふに節は念下りてとありしをいひて義と  
 りたりありよりありて生と云ふと云ふは  
 昔守如書釈經云義分云言南来とは節是故余念  
 教教如向之義高阿沙流佛を節是を以て新義あり  
 此生とありしよりありて生と云ふは梵治と云  
 節漢語に波の義あり 故余の字れきて云く  
 ためりし事と拍読れぬ旨と念はしむる所  
 よありしと云はは又ほと云ふ一智起信論釈義云余  
 言身命依依と云投向義返還義生死海中唯之靈功  
 此可化持拍有投向之靈體性而空生現世介尔心  
 性由本始末有覺今覺昔自此覺今覺昔覺覺後  
 心源在返還也余を依於久を連持不改之所彼事  
 元本懐推上西能名為不わ然行此云實法徳為一切衆生

法苑珠林卷之三  
 法苑珠林卷之三  
 法苑珠林卷之三





佛<sup>ツク</sup>に<sup>シ</sup>境<sup>ミヤコ</sup>よ<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
ふ<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>ひ<sup>ラ</sup>ひ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>ん<sup>ニ</sup>事<sup>コト</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
く<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>一<sup>ツ</sup>體<sup>クニ</sup>と<sup>ス</sup>一<sup>ツ</sup>體<sup>クニ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
入<sup>ル</sup>る<sup>ニ</sup>所<sup>ヲ</sup>と<sup>ス</sup>命<sup>ヲ</sup>と<sup>ス</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
も<sup>シ</sup>り<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
權<sup>リ</sup>大<sup>ニ</sup>業<sup>ヲ</sup>れ<sup>ハ</sup>教<sup>ヲ</sup>ね<sup>ニ</sup>あ<sup>ハ</sup>れ<sup>ニ</sup>て<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>

と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
ゆ<sup>り</sup>ら<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>勝<sup>オク</sup>福<sup>ユキ</sup>れ<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
事<sup>ヲ</sup>相<sup>ヲ</sup>れ<sup>ハ</sup>佛<sup>ヲ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>  
と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>念<sup>ヲ</sup>佛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>ハ</sup>権<sup>リ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>い<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>公<sup>キミ</sup>の<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ら<sup>ス</sup>に<sup>シ</sup>也<sup>ニ</sup>

行ありとよりけりて其のありは法華の如し  
法華の若し其れ教と信くはなせりて

法華といふは信ずるは阿修羅といふ名義集とる

よ阿修羅の梵名は舊譯より其の義を翻して男

といふもさるる見ゆし也女は信の義を翻して女

夫と翻して津名疏より其の義を翻して信天よ

と信とてやとされども其の義は夫とて女は信の

名ありとてん法華の義は阿修羅といふ名義集とる

畜生といふは阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

報ありといふは阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

とて其の義は阿修羅の事とて其の義は阿修羅の果

よりの苦患るる念我の事くして平いんり  
又法苑の中にもある事

乞禱は函のわたりなほどくも余人多く  
實もまじし唯上人のこわさるるも  
此後其頂白丸老若者かれどもそれ  
よそはひひとふりなれば光輝の  
うれの綿れもつぎよく前黄白ひれ  
念飛れさらかいまれありと何り  
池の邊のうそをそあうかるが  
ひ実盛が葉果れらるるつても  
目かよ

あつとどひり念佛れ上人の目かよ  
余らよりまじし事  
りし事やが富をそわろくも  
事ら信よとゆぬ事ありと  
よまらんしと死な生れし  
事ありとありあり原人教  
の事ありと紀列律福寺  
考しよとあどくりく  
て一人れ目かよ  
一事とくく湖列の醫者よ  
助者といふもの

しづも母を懐くは〜〜〜  
 ろ〜〜〜  
 和具十七年〜  
 なまの孫の目よ〜  
 媪門外よ〜  
 てい〜  
 こ今〜  
 らあ事〜  
 大よ〜  
 り〜

実盛が鬼の余人〜  
 む〜  
 海中に〜  
 後古〜  
 れ身〜  
 の〜  
 事〜  
 身〜  
 まで〜  
 孫〜



心とてび浄法佛と念の...  
重罪と消滅とある...  
と死のり又除八十億劫生死之罪と...  
主指を佛力廣大遍覆一切時...  
同一味法流生至安樂此彼一切劫...  
八十億劫之罪即此是殊佛功...  
有明文唱一變而鬼滅盡...  
此ら向の教教心と親強の...  
向して死と... 安楽世界の生とん...

いかに... 善導... 念の...  
二心功... 念の...  
持名の... 念の...  
此功... 念の...  
時... 念の...  
此... 念の...  
漸愧... 念の...







免あきとるをうらうの末の瑞れむいさくさ  
 あまりのわきうれいおにともみら葉じいさう  
 ゆけいめいれまうあはゆりし人やうらん  
 うんしといは平ふりさうりされいおれ末買居る瑞  
 の被と舎抄書いよむりうへ今れ実盛の名とゆあま  
 らまことあげうれまうりあまりの名を末代は  
 らの月れ敷とごう盛梅物終りまき  
 宗盛とく内大臣従一位号八島大臣大臣平清盛  
 元之男とく大臣とやあまの瑞とあまゆりし  
 年文わりとあまゆりしあまゆりしあまゆりし

れあよまうまらあれと末歴とくく唐人の瑞文  
 あり行事以御業まごうとあまゆりし  
 卿れあまに用ふ事深限あり秘笈新書あ  
 集いも増補も末買居ようたうどおのくもあ  
 心ふ事と瑞とくうと株あまの事いさうりえん  
 えうりらとく瑞あといまうゆけいれあまの後撰  
 集いのとくうあまゆりしと末買居が瑞  
 れ被と舎抄書いよむりうへ今れ実盛の名とゆあま  
 九卷と末買居の御賞に拜舎抄書を守と謂賞居白家不  
 酒あつた御書いよむりうへ今れ実盛の名とゆあま

カヲコモシニ止マテニシテヨルユカカ  
 カシニヨ  
 ヒキウレニシヨセニラ  
 ニヤウイテクニシニヤククワキニサレハ  
 ニヤウイテクニシニヤククワキニサレハ  
 ニヤウイテクニシニヤククワキニサレハ



謝とていへる前とされし礼とていへる一がらして  
 去替れお獲よなされうらかりし時買居るまはれ羽  
 と月にくらりしそらまされしとて去替れ此後とて  
 海もふ海とききうらやうにゆりあゆめりゆりゆり  
 のれ去替るの流よめひひのとおとせとも昔れ項  
 羽の流諸史品節三項羽ノ語ヲ載ルモ 繡ノ字ニカケリとありあり  
 の去守とありて細馬車タケニユのりり言蓋とていへ  
 呉那ゴキニれ男サガヒよりりぬらぬ海とて故の妻モトあり出  
 夫とていへる道ミチのやういと志ココロあり一掃ハラ除ハラしとて  
 とまらぬとていへる風フ情ゼイあり一掃買居るうら

おの車とていへる光とつらつらとていへる光に  
 ありありとていへる光とつらつらとていへる光に  
 秋アキにともあひのぬ家の雲クモよ二人のまれとていへる  
 食シクと給キタしてやとていへる光とつらつらとていへる光に  
 ようくともあひのぬ家の雲クモよ二人のまれとていへる  
 後ノチよとつらつらとていへる光とつらつらとていへる光に  
 夏ナツれ高タカまるとていへる光とつらつらとていへる光に  
 られらるるなりありとていへる光とつらつらとていへる光に  
 られらるるなりありとていへる光とつらつらとていへる光に  
 那ナとていへる光とつらつらとていへる光とつらつらとていへる光に  
 那ナとていへる光とつらつらとていへる光とつらつらとていへる光に

越列と号し宋に納與とのみ今此大明也と  
 具府と号し其の北に府城の東南にありて  
 去勢山のり大明一統志廣輿記にふむるあり  
 其れ中に色廣輿記の蘇州府に下と見えは  
 け蘇州府と秦世と去勢とのひりと記しきそ  
 府に名官の部に朱買臣とこのを記しがたこ  
 一は後して云お去勢を去の標印故也郎舎去人  
 朱去るをくくると記る朱買臣が在りて大明の  
 世は蘇州府といふ所なるまありあつたり  
 されまの去勢をくくりに標し一なるあり

笑や懺悔の物ごり公れあ底清く濁りとのこ  
 したまふあよ

公れあとの公とあまたつるに朱宏軍八回巻ふ  
 色良公なる不潔御月不現とのり底清く濁り  
 とのこあとのひひの二つ物とのこらひ罪とくろあよ  
 公中と死とよりして死ありときつる死を中とる  
 ひとくこれと去守れ懺悔よと去公徹到とい  
 あり

人見安左衛門 賀茂榮春 外屋妙喜 外屋了喜  
 一条通伊勢屋久兵衛 出水田甲吉兵衛 幾佐於長  
 松安壽珍 幼權童女 井筒屋了鏡信士  
 松尾甲斐守 小野越後守 松井平三郎  
 於由良 於与志 於由里 於加知 上田屋宗壽  
 長尾宗伸 内室 桔梗屋善兵衛 内室  
 理寛比丘尼 安貞 森氏母妙安 栄重尼  
 伏願 現當 悉地 田滿

富士大敷

暎<sup>ミシ</sup>暎<sup>イ</sup>乃<sup>ホフホ</sup>楯<sup>タイコ</sup>ハ大<sup>ホウク</sup>敷<sup>ク</sup>乃<sup>ク</sup>焼<sup>ク</sup>火<sup>ク</sup>  
 透<sup>ユイ</sup>敷<sup>ケウギマウ</sup>乃<sup>ク</sup>暎<sup>ミシ</sup>心<sup>ハ</sup>志<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>極<sup>ミ</sup>大<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>あ<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>念<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>  
 志<sup>イ</sup>燒<sup>マク</sup>俱<sup>ク</sup>脛<sup>テ</sup>却<sup>イ</sup>之<sup>ユ</sup>若<sup>ゼ</sup>振<sup>ゴシ</sup>と<sup>ハ</sup>判<sup>ハシ</sup>ト<sup>シ</sup>り<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>  
 之<sup>シ</sup>り<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>暎<sup>イ</sup>ハ<sup>ニ</sup>字<sup>ジ</sup>も<sup>ハ</sup>ふ<sup>リ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ト</sup>  
 くらり<sup>クワ</sup>大<sup>エ</sup>筋<sup>シ</sup>乃<sup>ク</sup>お<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ガ</sup>ぶ<sup>い</sup>く<sup>ク</sup>長<sup>ビシ</sup>守<sup>ダウ</sup>れ<sup>ハ</sup>二<sup>ガ</sup>河<sup>ビマ</sup>白<sup>ク</sup>た<sup>マ</sup>も<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>  
 と<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>川<sup>カハ</sup>よ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>  
 げ<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>女<sup>メ</sup>人<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>心<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>炊<sup>ホシ</sup>極<sup>ナウ</sup>れ<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>と<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>打<sup>ウ</sup>ぬ<sup>ク</sup>  
 女人<sup>メニ</sup>の<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>心<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>依<sup>ヨ</sup>死<sup>シ</sup>海<sup>ウ</sup>乃<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>い<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>邪<sup>キヨク</sup>  
 女<sup>メ</sup>死<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>び<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>海<sup>ウ</sup>乃<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>暎<sup>ミシ</sup>心<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>



大慈心と一神のありて世を成すなり八宝  
八宝乃地獄れらるるをば其後一人代えらるる  
けありんとし親世者と其の考と親すると云ふに世の  
生乃善妙と親してればけり身取通乃其後也  
かりましたん身取の考と其の考と半と何とせし  
と親するといふつらやんげんげん心ゆきも  
のどきくあふれを子細に洗ゆ考と其の考と人れ  
六根皆ふる心と身取と云ふに  
一神一合の損之あり

一神といひては由親世者と其の考と半と何とせし  
心中の親世者と念するに神と念といふと云ふなり  
天の大神も我ハ先神後念なりと解しあり考の  
ゆき神と念といふにけり一合の損之あり  
其後と一合の損之ありと云ふに  
為世親世者善後と云ふに  
敬親世者善後と云ふに  
力とあるに心念する半と念する半と云ふに  
つよと死にけり云ふに  
ある子細と云ふに

一神一合の損之あり  
心中の親世者と念するに神と念といふと云ふなり  
天の大神も我ハ先神後念なりと解しあり考の  
ゆき神と念といふにけり一合の損之あり  
其後と一合の損之ありと云ふに  
為世親世者善後と云ふに  
敬親世者善後と云ふに  
力とあるに心念する半と念する半と云ふに  
つよと死にけり云ふに  
ある子細と云ふに

法苑珠林卷之三十一

三十一



このれんてびとるくひとび念とるも執事れ以り

生六人のらゝさるりそとこ

構之孫へ思自子乃乃来るふとなりぬん

美玉の宝用といふもの子れ長長がまのし子とあり

一と般菴寺乃執事ふりりくふまも乃らあり

ぬがりあひ一筆わり執事強君強抄とわあるとれは

筆とのせちさうこれと井寺へまの道と乃君美志の

故るふらゝ似たりるて見はべ

板寺ゆ本にごも花咲屋ハものづらひまふ本家み

とり子ふあてびなごらなごらん

金湯練子すは板樹板樹と何り終る

生乃と兒の揚ねと終如強よのきまてまを中と

板本にまかあてび花乃と兒る筆とのせまり

ハ執事乃利生のそいりるのあわらるる筆あ終

卒塔婆流と云一向よ執事と後に見る筆わりをそ

以美人乃強よ万れ佛の乳より色平なれ終えにの

一と板る弟本もれらまらふ花と兒美あつと

二と逆強るるのそとらり目申乃故筆されもひ

と中扱とせる強今れきまれをそる弟本と花咲

くハい子も弟本のことり子あまが執事れ終也利





養八講する者之

此殿山乃山さること見ぬ物此お山と仰ん今目及  
前小孫や串よ何し有難乃決るやか様よんわ其  
されを我ハお小孫よふいや我かぐり程りなり何  
のる乳や畜乳にふと親子れ氣あるがうーまーてや  
人乃おやとていよ熱しとをさつる子乃乳  
とも白束乃乳も心や程あしん

比殿山と總多のお山とくはゆるる道平よ志る乳  
畜乳だも親子乃表ハ志るぞうとふたりけごの也  
親とあしと子とあしとくするゆののあしとあしと也的

物叶集云是乳 必に心程不可殺 羔羊跪乳慈

鳥返哺必行孝之 孔蛇蟻 悉具營營之 夫婦居行先

身親 彼羅生 與人何 吳 譚子政德 篇云史論

之性 与何 比 是 六 吳 乳 吳 飛 乃 之 其 也 慈 慈 也 何

ゆ半よりひろくのひさまあつて先のこま鳥小喃とくは

りらも何り 蜂蟻も若は乃乳とそるんをうらり公史師の

かもしとふくく 雁もくく 兄弟とまうらおよそ集ふと

いよの定よおわるものけさ史師父子のうらりもや

在子小鹿後よに 也と何のて乳六おそりさ鹿後さ

トラオホカニ

又子ねくつたいんやまを介乃多野島貴もや乗船の  
 とむひに巴猿の腸を割とめれへび後まんのあまのま  
 おまふとまうてかあーまざらんやとふはのけあま  
 いひをるなり

湯見寺

後河垂の石而之今れせ乃東海道及而地江戸道中  
 ありて心もあふくりくけち乃半と記あり

し種も考郷とや説の語ありてゆりー種るれ  
 於女が成佛の縁も任まてはとくのさびく屋さ  
 之井寺れりの考郷が病まらぬる種るるるるる  
 紀十其を及び非非考ふを率いふまびるるり今  
 あげさとおそれて申もはれ於女が成仏といはるるハ法花  
 有安湯産於王女と非八米智利振るるどけり  
 のり成仏する文ニ云尚時、衣舎皆見於女忽知之間變  
 成男子、具其産、乃及産、南方、空、世、界、坐、蓮、花  
 成、佛、也、是、也

先初衆の種とほく時を法乃無者とひぐく也後衆乃  
 種とつ時を是生滅法と響くなり衆別のみく、二生  
 成く已入るる衆成爲樂と響きて其提衆道の種れ衆  
 月も救てひて百八煩惱の眠り此醫く後れ世の遠いも

んやほとてりや

これより後六時チウマ 易ビのうちに中夜と目申ととのむきその

のうれ四時シジとわつらに之の如くヨマと六成の別之後夜曉實

時之晨トキ夜シジとわつらに之の如くヨマと六成の別之後夜曉實

けり入をイリモと六日波乃るニキモツこれにコトキ温藥シク乃のシク白シク文シク

と種カチ乃のカチかといひカチひカチぐんカチとカチ半カチ田カチ抄カチのカチ八カチ考カチへカチ均カチとカチ今カチ按

ずるふカチをカチ梵カチ文カチ河カチりカチ温カチ生カチ藥カチ集カチ白カチ法カチりカチをカチ是カチ生カチ滅カチ法

生滅カチ之カチ已カチ寂カチ滅カチ為カチ未カチ祇カチ園カチ寺カチをカチ是カチ為カチ雲カチ西カチ角カチ有カチ頗カチ梨

種カチ之カチ中カチ亦カチ説カチびカチ偈カチ之カチのカチ要カチ集カチれカチんカチんカチんカチ坐カチ持カチるカチれカチ説カチ法

志カチ多カチいカチ一カチ祇カチ園カチ精カチ舍カチ小カチをカチ是カチをカチ業カチとカチをカチ病カチ人カチのカチ際カチ終カチるカチ事カチのカチを

おろりてカチおカチさカチぎカチ業カチわカチりカチしカチがカチそカチのカチ角カチ小カチ園カチ梨カチ種カチ河カチりカチを

種カチ乃カチ歎カチふカチのカチ温カチ藥カチ種カチれカチ白カチのカチ文カチとカチ死カチとカチ死カチとカチ法カチ苑カチ林

林カチ百カチ十カチ八カチをカチ鳴カチ種カチ知カチとカチ見カチ仰カチふカチ此カチ多カチ羅カチ院カチ石カチ種カチはカチ道

云カチ乃カチ拘カチ樓カチ秦カチ佛カチのカチ造カチりカチあカチるカチもカチのカチ物カチ此カチ目カチのカチをカチあカチてカチお

時カチのカチ種カチ此カチうカチふカチもカチあカチつカチのカチ佛カチいカチまカチとカチ十二カチ知カチ種カチとカチ死

ありカチ舎カチ染カチ賊カチ乃カチ童カチ男カチ童カチ女カチしカチじカチくカチあカチりカチてカチれカチとカチさ

也カチとカチ紀カチ字カチりカチ今カチれカチうカチひカチのカチ説カチ乃カチとカチ心カチ方カチ北カチ角カチるカチやカチつカチ乃

種カチがカチ初カチ夜カチ後カチ兼カチ是カチ初カチ日カチ波カチふカチるカチもカチくカチ一カチ句カチつカチとカチとカチけカチるカチやカチら

心カチ説カチ乃カチのカチあカチつカチもカチさカチんカチわカチうカチるカチもカチのカチ卒カチ後カチ也カチ種カチよカチ云カチ種カチを

持カチ舎カチれカチ種カチ乃カチのカチあカチつカチもカチさカチんカチわカチうカチるカチもカチのカチ卒カチ後カチ也カチ種カチよカチ云カチ種カチを

持カチ舎カチれカチ種カチ乃カチのカチあカチつカチもカチさカチんカチわカチうカチるカチもカチのカチ卒カチ後カチ也カチ種カチよカチ云カチ種カチを

と題めてあるあふ今ううおたうぬ世とかなと  
 んよひぐりりわひらよそいひゆる文のまは然り  
 五者とは依根ハ生住異滅ハ依根ハ生老病死す  
 加え解ハ生阿若者ハつねに滅する故よ是生滅法と  
 云へ生滅も滅して已後ハ寂滅ゆえ無跡跡不と禁と  
 するへいさと寂滅為来といふに依根ハ来未去也  
 根も中ふあしゆる心あるものも来未去もつゆあ  
 りびをせとことしあふあくあるものも来未去もつゆあ  
 弘法ハ仰いゆるとつゆあふあくあるものも来未去もつゆあ  
 るをせとせとれとつゆあふあくあるものも来未去もつゆあ

ふとさうなるれくあふあくあるものも来未去もつゆあ  
 びとへはが坂の二るとよみしとしそもあふのたぐ  
 ひとや今世乃小兒女れよ智の初門とさるものえそ  
 後よ僧教人仰深業の教よゆきつらるんと教して  
 系乃一字とくえて軍八字乃作是故といふゆき  
 とい佛とつりそを八教極北賦りのおとらくとつらる  
 び獲り教ふ百八の教極も消滅するとしを平記を十  
 五三井寺つとごひれ半と志はざるふよ云三井寺お阿  
 りそいひる乃と教とくく人至ぬ本教乃教とあてり  
 て教を中世乃わつていふとまらしまの代のあていふとく

の弊せうりつとむげよも今乃世此種カ子の致モお百八の  
 いやとよものぞつゝばよの百八帆ボン悔ツウ乃ずと表す  
 ととい偽ツタへりされども種カ子乃致モハ元来一揚シラりぬまのこ  
正戒ハ輪リ五リ統ツウ律リの像ガ或ハ德トク佛ブツ成ジャウ道ダウの如ニ或ハ公コウ有ユウ九ク持ヂ  
カの形カ或ハ月グツク月グツク望バウ辰チンの象カクやとど畫エ揚ヤウハ造ソウ行コウるも乃  
 かろテウ〜くセシ法ハフ苑エン珠シュ林リン由ユ是ゼより目ニツ光クワウハ兼ケン附フせ  
一ノ難ナン必ニ乃ノ種カ子とと希ヨ天テン和ワ第ダイ三サン乃ノ如ニ夏カ冲コウ法ハフ律リ  
下小ゲ下カ向コウぞし形カリやし傍ソバよよりてくは佛ソウ以カに形カと  
畫揚ヤウもあくとと乃カ子種カ子と六ロク乃りつるもの之ホツ義ダイ提タイの字ジ  
 此ハハことりの義イ乃ニ源ゲン氏シ依イ義ダウのぶと百八ホニヤク帆フナと

八ハチ平ヘイ鼻ビ長チヤウ龍リウ之シ六ロク維イガ夫フ者シャ味ミ觸シヤク法ハフ乃ノ六ロク藝ゲイ小コ  
 對ダイする時トキ好コウ藝ゲイ平ヘイ乃ノ三サン種シュとしよよりり好コウと六ロク目メよ美ミと  
 えてと平ヘイよ美ミとさうて色シキを介ケ六ロク振シンともいんよ死  
 とちよよと好コウといふ又マタそ六ロク振シンと六ロク藝ゲイと乃ノじよと死シん  
 ふうかりずつやあるものとといふ意味キミと想ソウといふ平ヘイ  
 と六ロクの好コウ藝ゲイ乃ノ三サン乃ノれわりひひ成セイるよげとる死シ平ヘイ等トウなる  
 んと云クニされとと帆フナ悔ツウのなるもの念ネンくふやまぬぬよ好コウ藝ゲイ  
 平ヘイ乃ノ三サン種シュともい六ロク振シンつとをはる幸シヤウえそ六ロク振シンと好コウ  
 平ヘイとよりわりわかれ三サン乃ノ十八ジヤツパチと死シ之シ好コウ藝ゲイ乃ノの好コウ藝ゲイ由ユ系ケイ  
 更ミナとあり好コウ藝ゲイ由ユ不フ来ライ更ミナとあり平ヘイ藝ゲイ由ユ不フ苦ク不フ来ライ

法苑珠林三井寺二

四十六





おまばらのけうくまの月教をばるるじるる

卒都婆小町

佛ハ既ゴブりゴブ。故ゴブハハゴブ。世イデヨメ。中ウ間セ。
   
 カナギゲカツツミシシシグメイホシシシシイクラウウウミミカカ。
   
 是セ玉クをレ既シとリ人ニ。五イ逆ツ殺シ心ヲ集メ云フ法ヲ。
   
 此コ暮ク危イ指シ吟ムのノ照シ悉スのノ月ツ未キ。
   
 お佛ゴ及シ中ウ間セ。五イ逆ツ殺シ心ヲ集メ云フ法ヲ。
   
 のノハハ持シ迦シ法ヲ。是レ五イ逆ツ殺シ心ヲ集メ云フ法ヲ。
   
 是レでシあリなクたシ。
   
 何ニ乃キ善キとシなクたシ。
   
 へシ法ヲ勤シ悉スのノ月ツ未キ。
   
 是レハハ持シ迦シ法ヲ。

法華經三井寺二

四十八









知所てよく一切の物とやがりさげると金剛の龍の  
 かし色換ぞす。びを破りして仏菩薩の如魔とて  
 くくうちまひが怒とてごとくく対治す。ひよ  
 たり。薩摩とていりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 とり。薩摩とていりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 備乃下れ字とて。器とててて。其薩摩といひ或はよ  
 其薩摩の二とてとて。下乃二字をりまてとていり  
 て薩摩とていりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 念くよやまだ。産生とて。産度とていりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 といりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 のと分とて。薩摩とていりる皆なり。かこくは其攪薩摩

くらくくらくらくららの金剛薩摩。産生産度のたぬよ。わり  
 みせいはつは。お多お多。お假といひ。二摩耶といひ  
 りり。大目の産法。またつるお乃。四種の愛茶産といひ  
 しとて。いりる皆なり。かこくは其攪薩摩  
 茶産。二の法。愛産。産。四の錫。産。愛茶産。二の又。三摩耶。産  
 産といひ。産生。の地。あり。大風。とれ。りら。愛茶産。二の又。三摩耶。産  
 愛茶産。といひ。産生。乃。心。法。より。月。蓮。花。の。より。あり。さ。さ。さ  
 つら。愛茶産。といひ。産生。乃。心。法。より。月。蓮。花。の。より。あり。さ。さ。さ  
 の。う。ら。と。観。と。る。お。極。の。大。なる。なり。次。よ。法。愛。産。と。ハ  
 法。の。乃。改。産。と。い。え。錫。産。愛。産。と。い。り。任。任。任

キフセバ カド セツ  
 の威儀キホウ及び成仙ジフ乃俵丈ヒラサキとなるカスをヒツキ半ナハ竟ハ寧ニ塔ト築キの  
カガ中ナカふミ金剛クワウ薩サツ摩マのニ市チ假ケしニ久キウ保ホ之シ歷リキ耶ヤ航コウとルれクこ  
キフセバとルるルをシとシ同抄ドウセウはハ半ハ保ホ既シハハまマりリくクとシ  
チ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ

チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ

チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ

チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ  
チ此チのノ地チのノ大ダイ風フウをウ入イルル又マ又マ捕ホハハ人ヒト乃ナ興キョウ



ながく久ほおのけり申さし流して。羅海の中へ  
 へぬるなれば用ひぬるごと。若く二滞れりるるなり  
 管教し見たり。又胎中より又位とりやるとはゆ申す  
 又回妙法。觀の處なり天と象海。まをれ形なり。是  
 のまをれば此と表と。あま風乃おつものごと。今寧  
 垢壁のまごめりたり。此あま風をまごめりたり  
 體なり。愛と人の形と。いと久ほをまごめり。人の  
 體とより。おとて人よめり。いふ方おのれあま風を  
 とまごめりたり  
 一見寧垢壁。羅海之惡道

びを説く説と。なりあるよ。勝敗羅尼。此は男女  
 名。此は羅尼。安を。情と。或は安を。此は  
 玉寧垢壁。中。於前。情。或。時。遙。見。或。相。道。其  
 影。映。身。或。後。風。吹。後。羅。尼。等。情。上。控。藝。為。身  
 志。所。有。罪。業。應。望。惡。道。在。惡。心。若。皆。忠。不。更。以。文。乃  
 意。な。と。と。り。て。一。見。寧。垢。壁。羅。海。之。惡。道。と。り。る。學。免  
 角。人。師。の。指。と。是。と。り。羅。海。を。く。り。て。く。つ。た。と  
 海。文。ハ。な。り。と。説。か  
 一念夜起。若くは  
 一念と。いふ。乃。不。利。乃。わ。の。の。念。た。と。い。一念。の。わ。の。



菩提心乃西法と云ふは人の心はふよふなるくのおやまりのあり  
月庵うとど

うらむらど礼と云ふはなまざりて教へるを

思して仏ありありての軌面礼と云ふは佛の法と

然て礼ありての礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

を云ふは礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

を云ふは礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

を云ふは礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

著て礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

と云ふは礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

は人の心と云ふは人の心

それの礼と云ふは人の法なりと云ふは人の法なり

恵ん信於心要集云云送順俱後互致業

導と云ふは人の法なり。又悔の時礼

仏乃教と云ふは人の法なり。又悔の時礼

と云ふは礼と云ふは人の法なり。又悔の時礼

法と云ふは人の法なり。又悔の時礼

まことと云ふは人の法なり。又悔の時礼

よはまづと云ふは人の法なり。又悔の時礼

なるもの。我と云ふは人の法なり。又悔の時礼

一はあり。れと佛法の逆縁ギョクエンまたあり。れと  
 一はあり。人の後ヒトノノチよとれわはば成ナリえとが。又またもとらぬ  
 心とれありとてかたわがる。そとくたとい逆縁ギョクエン  
 と。佛法ブツポフよ縁エンとじもぶ人ヒト成ナリよじりくなくぬ。ぬふ  
 逆縁ギョクエンなりと浮ウカくべしといゆあり。もと悪心アクシンと逆縁ギョクエン  
 と。よ縁エンと踏フミがと心ココロほしあり

提婆テイバといふ。仏乃ブツノ又淨飯ジヨウハンをれ以モ食シキ才サイ斛コク飯ハンをノ子シ阿ア  
 難ナンのためよ先マシ擇タク迦カ來ライのためよいとことくりよと  
 提婆テイバを多タむむひの蓮レン境キョウと。むむひの潤ジュン蓮レンよりあり。

凡ソノの梵ボン僧ソウと。とらうてよその天テン熱ネツと熱ネツと。熱ネツと。熱ネツと。熱ネツと。  
 細サイの生セイ道ドウ一イツ時ジキよもや熱ネツ川のカハのわつりれて人ヒトる天テン人の  
 一イツよもわつりいざりいざりけり。天テン熱ネツと。熱ネツと。熱ネツと。熱ネツと。  
 むむひの仏ブツ身ミ子シ乃ノ和ワ合ガフをレ引ヒキく。わむひの仏ブツ乃ノ淨ジヨウ  
 身ミより血ケツとわし。又またの阿ア世セよよへて志シ元ゲン淨ジヨウ後ゴ成セイ  
 となら。仏ブツ成セイふま。あ。死シ氣キ比ヒ生セイ尼ニと卷マクくをレ打ウチく。一イツ  
 十ジュウの捲マク乃ノ死シよ毒ドクとわりて仏ブツと傷キズ者モノ口クチん。一イツよ  
 一イツよ又また逆ギャク縁エンとわく。行ユクひる人ヒトなれ。生セイなぐ。空クウ同ドウ  
 地チ獄ゴクよわら。一イツよ大ダイ悪アク人ニンなり。をレ比ヒのレわら。ふ今イマ  
 一イツわら。つらなる人ヒトぬ。もあれ。わら。をレひ。なれ。ゆ。成セイ

ナイキキ  
お城化よものせりりやういおとなせよらまらる  
比ごふおぼぞとまゆとんよおくせて人の悪業よ  
さばやういもるさういよお執事乃悪徳と申すや  
とくろこびさう指廻後とびた度余強よわり  
あ一晚よくりくろり。あわらるん道徳と伝たそ  
とふ徳徳よひくしあく乃候もよおけんよそ見  
魚し。これおお徳とぶら。大業十法強去善男子あ  
まぼとれりらひをこ  
藥物が魚癡と又殊れなる  
まぼとれりらひをこ  
シドグ  
シドグ

藥物といふはさう周梨藥物ととも又ハ周梨藥物  
よ。よお徳後之唐よ徳たともひ。又ハ大徳色とも  
そ母藥物と徳妊せし時天竺のなつひよ親の雲に  
りりて子次徳生とば法るればそあよりなるし申  
途よとて藥物とまけけり。れりこ死をやひ  
らり乃あまあけし時色徳あよて徳生と今又  
それよつごそたのやとりまは藥物とまけけるな  
まばあれたるうんよ又つごるしりふんまは徳たといり  
大徳色といふはたの字と二度まで乃りなればあつ  
けらりてをい人おあやしといんごんあ徳あして  
五那夫  
コト

五那夫

コト

解<sup>ゲ</sup>を<sup>シウ</sup>生<sup>ウ</sup>と<sup>シラ</sup>ぼ<sup>シ</sup>る<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>わ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>だ<sup>シ</sup>。こ<sup>シ</sup>を<sup>コ</sup>去<sup>コ</sup>せ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>大<sup>ダイ</sup>法<sup>ホフ</sup>所<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>ど  
 已<sup>シ</sup>弘<sup>コウ</sup>法<sup>ホフ</sup>所<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>人<sup>ヒト</sup>よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>。  
 そ<sup>シ</sup>先<sup>サキ</sup>ハ<sup>シ</sup>結<sup>ケツ</sup>白<sup>ハク</sup>仏<sup>ブツ</sup>通<sup>ツウ</sup>と<sup>シ</sup>飲<sup>イン</sup>食<sup>シキ</sup>日<sup>ニチ</sup>り<sup>シ</sup>。お<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>知<sup>チ</sup>なる<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>。  
 の<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>使<sup>シ</sup>次<sup>ジ</sup>つ<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>び<sup>シ</sup>還<sup>エン</sup>依<sup>イ</sup>せ<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>。  
 築<sup>シク</sup>物<sup>モノ</sup>こ<sup>シ</sup>六<sup>ロク</sup>は<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>仏<sup>ブツ</sup>の<sup>シ</sup>寺<sup>ジ</sup>つ<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。  
 な<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>び<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>梅<sup>バイ</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>仏<sup>ブツ</sup>を<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。  
 あ<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>掃<sup>ソウ</sup>帚<sup>ジウ</sup>乃<sup>ノ</sup>二<sup>ニ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>毎<sup>バイ</sup>日<sup>ニチ</sup>を<sup>シ</sup>及<sup>ジツ</sup>補<sup>ボ</sup>す<sup>シ</sup>。  
 ま<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>掃<sup>ソウ</sup>帚<sup>ジウ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>な<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>築<sup>シク</sup>  
 物<sup>モノ</sup>を<sup>シ</sup>説<sup>セツ</sup>め<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>一<sup>イチ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>一<sup>イチ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>。ひ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
 日<sup>ニチ</sup>夜<sup>ヤ</sup>を<sup>シ</sup>度<sup>タク</sup>す<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>。た<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>。

ゆ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>六<sup>ロク</sup>劫<sup>キョク</sup>の<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>な<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>。  
 り<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>。感<sup>カン</sup>障<sup>ショウ</sup>と<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>漢<sup>カン</sup>  
 と<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>又<sup>マタ</sup>守<sup>シュ</sup>口<sup>コ</sup>持<sup>ヂ</sup>を<sup>シ</sup>身<sup>ミ</sup>莫<sup>バク</sup>托<sup>タク</sup>必<sup>ヒツ</sup>是<sup>シ</sup>外<sup>ガイ</sup>増<sup>ゾウ</sup>度<sup>タク</sup>せ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
 り<sup>シ</sup>又<sup>マタ</sup>と<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>へ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>夜<sup>ヤ</sup>白<sup>ハク</sup>摩<sup>マ</sup>訶<sup>カ</sup>羅<sup>ラ</sup>の<sup>シ</sup>  
 二<sup>ニ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。そ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>文<sup>モン</sup>殊<sup>ジュ</sup>の<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>莫<sup>バク</sup>薩<sup>サク</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>中<sup>チュウ</sup>の<sup>シ</sup>智<sup>チ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
 し<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>道<sup>ダウ</sup>去<sup>コ</sup>七<sup>シチ</sup>仏<sup>ブツ</sup>乃<sup>ノ</sup>伸<sup>シン</sup>と<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>獅<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>乃<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>  
 り<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>也<sup>ヤ</sup>。妙<sup>ミョウ</sup>智<sup>チ</sup>を<sup>シ</sup>畏<sup>イ</sup>の<sup>シ</sup>相<sup>サウ</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>日<sup>ニチ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>。的<sup>テキ</sup>服<sup>フク</sup>造<sup>ゾウ</sup>の<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>  
 ま<sup>シ</sup>ご<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。畢<sup>ヒツ</sup>竟<sup>キョウ</sup>過<sup>カ</sup>儼<sup>エン</sup>身<sup>ミ</sup>一<sup>イチ</sup>な<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>ど<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>。そ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>ハ  
 築<sup>シク</sup>物<sup>モノ</sup>と<sup>シ</sup>文<sup>モン</sup>殊<sup>ジュ</sup>も<sup>シ</sup>又<sup>マタ</sup>よ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>な<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>。  
 忍<sup>ニン</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>長<sup>チヤウ</sup>ら<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>。

これ六天を家まで少はる流に乃性性怒のそよ  
ておぼへしと仏界より下地獄までの十界よりさ  
よ色性善性怒乃相を定しておぼへし仏と名を  
性怒がわるくよ地獄獄界等凡念を念つていさ  
すまざるしげふとこれごとく生遊交乃機生ず  
れどもそを善悪二念乃しら大おとなるおが仏なるお  
よのり乃九界れんとわまるの六阿道と名を大お  
乃佛心なるものよ力と成てよくおまされるなりと  
善心と名あるしこれとたある阿羅乃桑田のとをめぐ  
るよたよもそ細かん桑田とひく阿羅いたのきよ  
りれどもそよとくまされる機はあつと夜の方よゆくも  
のなりされども機ゆくのゆくとそく阿のさへめてそや  
まらねるがゆくの機よそ機の方へ阿れよよひられて  
おぼへたれ方よゆく半とびと人乃を桑田といふ  
大お乃善念よたよ機と六九界れんのたあくとりらに  
おぼへるもこれよとくエ支と生まるとこれよ  
りら仏の性善性怒乃少はる又生をよとく元来性  
善なるし何しとよ原よりと見わたりる善阿の念  
及び仏界と教する一念のれれ心なりされがなる地獄の  
念生乃一念と佛心なりとよまると大お乃んが地獄乃ん

これ六天を家まで少はる流に乃性性怒のそよ  
ておぼへしと仏界より下地獄までの十界よりさ  
よ色性善性怒乃相を定しておぼへし仏と名を  
性怒がわるくよ地獄獄界等凡念を念つていさ  
すまざるしげふとこれごとく生遊交乃機生ず  
れどもそを善悪二念乃しら大おとなるおが仏なるお  
よのり乃九界れんとわまるの六阿道と名を大お  
乃佛心なるものよ力と成てよくおまされるなりと  
善心と名あるしこれとたある阿羅乃桑田のとをめぐ  
るよたよもそ細かん桑田とひく阿羅いたのきよ  
りれどもそよとくまされる機はあつと夜の方よゆくも  
のなりされども機ゆくのゆくとそく阿のさへめてそや  
まらねるがゆくの機よそ機の方へ阿れよよひられて  
おぼへたれ方よゆく半とびと人乃を桑田といふ  
大お乃善念よたよ機と六九界れんのたあくとりらに  
おぼへるもこれよとくエ支と生まるとこれよ  
りら仏の性善性怒乃少はる又生をよとく元来性  
善なるし何しとよ原よりと見わたりる善阿の念  
及び仏界と教する一念のれれ心なりされがなる地獄の  
念生乃一念と佛心なりとよまると大お乃んが地獄乃ん

なる如きの有りなり九界ハこれ又護下となりて。さうさう  
さぶなるぬりし。されば水と見え。あつと見ゆハこれ又此の  
おれゆはなり。まゝと水とあつと別所分なき。善悪  
の二法と。速悟の時の何は。中住の善悪の二法は  
めくなき。さうさうこれどよく。またさびの悪見よさら  
おろす。天衣大師の。魔界如佛界。一水二氷と云  
ふも。いこゆし

此の如きも善提也

これハ心教の正の善劣所是善提といふゆとよく  
知ぬすべし。此の如きも善提といふゆとよく

此の如きの有りなり九界ハこれ又護下となりて。さうさう  
さぶなるぬりし。されば水と見え。あつと見ゆハこれ又此の  
おれゆはなり。まゝと水とあつと別所分なき。善悪  
の二法と。速悟の時の何は。中住の善悪の二法は  
めくなき。さうさうこれどよく。またさびの悪見よさら  
おろす。天衣大師の。魔界如佛界。一水二氷と云  
ふも。いこゆし





と一偈ゲありてカ可カとリんトとセーハあハとラ座ノ非カと  
 久クあハりテ偈トはクりテ云ハ身ハ是レ菩提ノ樹ノ心ハの後  
 盡ス時ニ勤テ拂テ不レ假有藝埃。是レ不レ見レ性也。復シ云フくニ  
 と弘ク悲シとモりト一トとツ一トとク言ハふコト。此ノ時ニ  
 確カ切ニのわりヨ。因トつクとク信トけるハ。中ノ死ノとモのコト也ニ。此ノ時ニ  
 とレはク。我レ等ニまハれテ佛ノ座ノ下ノにありテ。非カ  
 秀トりト死ノ人トとレのコト一ト偈トとモりト。此ノ時ニ。此ノ菩提ノ樹ノ  
 樹ノの後とモ。此ノ時ニ。何レ假ニ拂テ藝埃とシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ

字ノ面ニ菩提トとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 てハ。畢レ波ノ樹トとシ。佛ノ座ノ下ノにありテ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ  
 此ノとモりト見レ性トしてハ。此ノ法ノ法ノとシ。又シ祖ノ弘ク悲シ

かゝりしうふし。び。轉。來。空。ぬ。と。冬。均。せ。ハ。似。生。の。二  
つ。乃。色。つ。も。色。あ。る。ま。り。に。し

凡<sup>ゴ</sup>丈<sup>ブ</sup>

澤<sup>シラト</sup>出<sup>ミ</sup>生<sup>ム</sup>生<sup>ミ</sup>海<sup>ニ</sup>經<sup>ル</sup>。凡<sup>ゴ</sup>丈<sup>ブ</sup>の<sup>ニ</sup>字<sup>シ</sup>と<sup>ヨ</sup>庸<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>丈<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>注<sup>ス</sup>せ  
已<sup>チ</sup>終<sup>ル</sup>バ<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>其<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>亦<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>を</sup>と<sup>ひ</sup>く<sup>る</sup>な<sup>を</sup>  
の<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>乃<sup>リ</sup>ゆ<sup>じ</sup>

す便<sup>ラ</sup>

視<sup>シ</sup>庭<sup>ニ</sup>奉<sup>ル</sup>花<sup>ヲ</sup>も<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>法<sup>ノ</sup>使<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>匠<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>注<sup>ス</sup>して<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>  
枝<sup>キ</sup>乃<sup>リ</sup>さ<sup>し</sup>ひ<sup>き</sup>淺<sup>く</sup>切<sup>ん</sup>が<sup>え</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>の</sup>ひ<sup>や</sup>う<sup>に</sup>誘<sup>ハ</sup>引<sup>ル</sup>  
一<sup>ニ</sup>た<sup>り</sup>の<sup>も</sup>凡<sup>ト</sup>ま<sup>よ</sup>似<sup>た</sup>へ<sup>ハ</sup>引<sup>入</sup>れ<sup>ら</sup>る<sup>便</sup>と<sup>シ</sup>て

偽<sup>ニ</sup>

偽<sup>ニ</sup>ら<sup>う</sup>べ<sup>と</sup>此<sup>に</sup>よ<sup>つ</sup>けて<sup>ニ</sup>交<sup>ハ</sup>礼<sup>ス</sup>一<sup>と</sup>も<sup>ハ</sup>  
即<sup>チ</sup>べ<sup>レ</sup>淺<sup>比</sup>よ<sup>つ</sup>け<sup>ル</sup>其<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>乃<sup>リ</sup>ゆ<sup>じ</sup>と<sup>シ</sup>交<sup>ハ</sup>礼<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ハ</sup>。其<sup>レ</sup>幹<sup>ヲ</sup>も<sup>ハ</sup>  
身<sup>ニ</sup>は<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>業<sup>乃</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>の</sup>ぞ<sup>く</sup>由<sup>ハ</sup>。持<sup>ハ</sup>伏<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>ね<sup>と</sup>ば<sup>し</sup>  
く<sup>ん</sup>く<sup>ハ</sup>美<sup>倍</sup>後<sup>に</sup>ね<sup>よ</sup>垣<sup>ニ</sup>り

極<sup>ゴ</sup>楽<sup>ラク</sup>

阿<sup>ラ</sup>彌<sup>ト</sup>後<sup>に</sup>經<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>但<sup>シ</sup>交<sup>ハ</sup>礼<sup>ス</sup>取<sup>ル</sup>極<sup>メ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>モ</sup>死<sup>ス</sup>ま<sup>ひ</sup>て<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>の  
樂<sup>ノ</sup>の<sup>も</sup>と<sup>を</sup>け<sup>て</sup>三<sup>ノ</sup>惡<sup>道</sup>の<sup>名</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>ぬ<sup>が</sup>。其<sup>レ</sup>後<sup>に</sup>の<sup>澤</sup>出<sup>ル</sup>  
法<sup>仙</sup>も<sup>も</sup>澤<sup>出</sup>わ<sup>き</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>モ</sup>死<sup>ス</sup>て<sup>モ</sup>極<sup>メ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>ハ</sup>。阿<sup>ラ</sup>彌<sup>ト</sup>分<sup>ク</sup>縁<sup>ト</sup>

後<sup>ニ</sup>

乃<sup>リ</sup>淨<sup>ク</sup>土<sup>ノ</sup>の<sup>ゆ</sup>じ  
沙<sup>カ</sup>と<sup>塔</sup>と<sup>主</sup>と<sup>て</sup>。若<sup>シ</sup>金<sup>乃</sup>肌<sup>ハ</sup>。ぬ<sup>や</sup>ん





紅印  
印

33

